

上海上氏族の出現と変遷

ヤマト王権と上海上氏族

かずさのくに国府探検会

高橋 邦明

2026年10月1日

2026年10月1日

テーマ：上海上氏族の出現と変遷

目次

はじめに 上海上氏族についてのアプローチ

第1章 弥生時代末期の房総

第2章 邪馬台国と神門古墳群

- 2. 1 卑弥呼の擁立
- 2. 2 卑弥呼と神門古墳の関係（想像）

第3章 海上氏族の誕生（想像）

- 3. 1 ヤマト王権の東方遠征
- 3. 2 海上氏族の誕生
- 3. 3 海上氏族の基盤形成

第4章 海上首長連合（大海上国）

- 4. 1 海上首長連合
- 4. 2 海上国造

第5章 ヤマト王権の中央集権化と地方支配

- 5. 1 ヤマト王権の地方支配
- 5. 2 海上氏族の動向

第6章 海上国の分断と小国の分立

- 6. 1 新興勢力の台頭と海上国の分断
- 6. 2 総の国の国造

第7章 律令国家における上海上氏

- 7. 1 上総国の成立
- 7. 2 海上郡司
- 7. 3 海上郡司と仏教

あとがき

2026年10月1日

テーマ：上海上氏族の出現と変遷

はじめに 上海上氏族についてのアプローチ

本章では、かつて養老川左岸を起点に房総の中央から千葉県北部一帯の広域を支配したとされる上海上国造の祖先(海上氏族)について、次の通り推測・想像してみたい。

古代の海上氏族について、その出現は古墳時代前期と思われるが、彼らの記録はほとんど無く、書籍や論文・資料を調べても手掛かりは欠しい。特に4世紀は記録のない歴史の空白期であり、実態把握は難しい。

そこで、ヤマト王権の出現・成立とその勢力拡大による総の国への影響から海上氏族の出現について推測し、各種文献や姉崎古墳群の年代別推移等から海上氏族の動向を想像すべく関連年表を作成してみた(添付参照)。

以下作成した関連年表に基づき、弥生時代末期から古墳時代、そして、律令国家の成立に至る総の国と海上氏族の動向について私の想像も含めて述べてみたい。

2026年10月1日

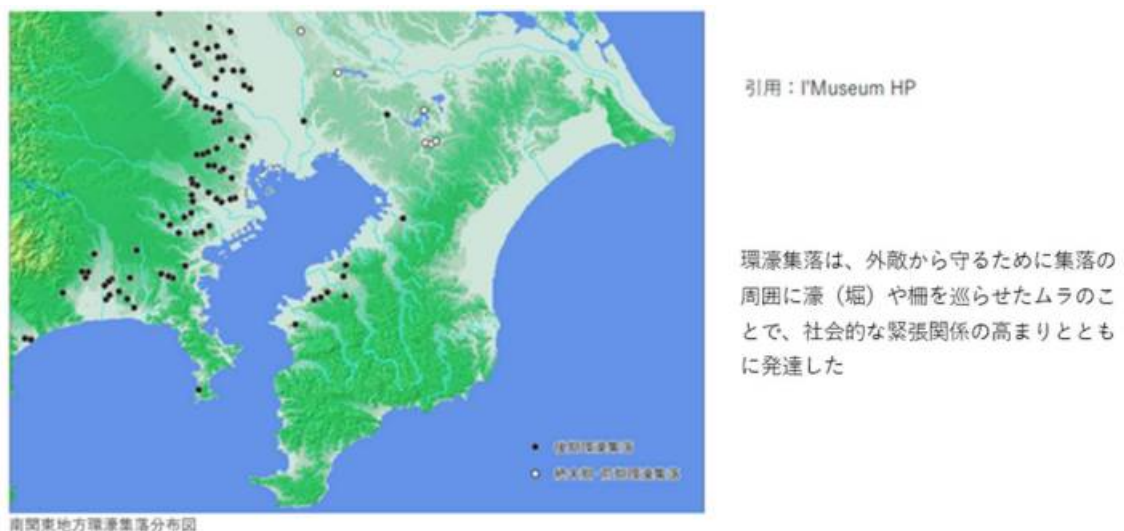
テーマ：上海上氏族の出現と変遷

第1章 弥生時代末期の房総

およそ3000年前に大陸から北九州に伝わった水稻の稲作農法は、紀元前1世紀頃には南関東まで広がり、房総では東京湾岸平野部や養老川、村田川等の河川流域に水田が開発され、ムラが形成された。ムラの規模が大きくなると、テリトリーをめぐる争いがおこり、環濠集落が形成されるようになる。

弥生後期、房総では農業生産が向上し、人口が増えたことにより環濠を超えてムラの規模が拡大した(環濠集落の解体)。

2世紀後半に北部九州をはじめとする西日本地域に倭国大乱と呼ばれる争いが起こったとされ、その影響は北陸や東海にも及んだと思われる。東海地域から南関東への大規模な人の移動があり、緊張関係の増大から東京湾西地区に環濠集落の形成・増加が見られるが、房総では逆に減少しており(下記「弥生時代後期・終末期環濠集落の分布図」参照)、争いが少なかったことが伺える。弥生時代終末期の房総は、温暖で、食料事情がよく、比較的平和で住みやすい土地であった。



その結果、他地域からの移民も含め、房総では人口やムラが急増し、数百軒単位の大きなムラも形成された(例:草刈遺跡のムラ)。同時に、ムラの首長を中心とした階層が形成され、首長の墓として大型の方形周溝墓等が作られた。また、発掘された土器や小銅鐸、鉄剣などのから東海や西日本、北陸との交流が伺える。

2026年10月1日

テーマ：上海上氏族の出現と変遷

第2章 邪馬台国と神門古墳群

本章では、3世紀前半の邪馬台国の時代に築造された神門古墳群について、奈良の纏向古墳群と比較した上で、卑弥呼との関係性について想像してみたい。

2. 1 卑弥呼の擁立

北九州をはじめとした西日本の地域では、2世紀後半の倭国大乱を経て、100余りあったクニが統合されて30余りになり、それらのクニが連合して女王・卑弥呼を擁立した。その都が邪馬台国であり、30余国を治めた。卑弥呼は、たびたび魏に遣使朝貢し、「親魏倭王」印と銅鏡100枚を授与された。卑弥呼は魏の権威を背景に各地の有力勢力に鏡を配布して同盟強化を図ったとの説がある。

邪馬台国の所在地については諸説あるが、ここでは、奈良の纏向を邪馬台国と想定した上で、卑弥呼と神門古墳との関係について想像してみたい。

2. 2 卑弥呼と神門古墳の関係（想像）

3世紀初頭、中央からの氏族集団が養老川の台地を訪れ、定住して地域の首長となり、3代に渡ってクニを治め、初期的な前方後円墳（神門5号墳、4号墳、3号墳）を築造した（黎明期ヤマト王権の拠点的支配）。

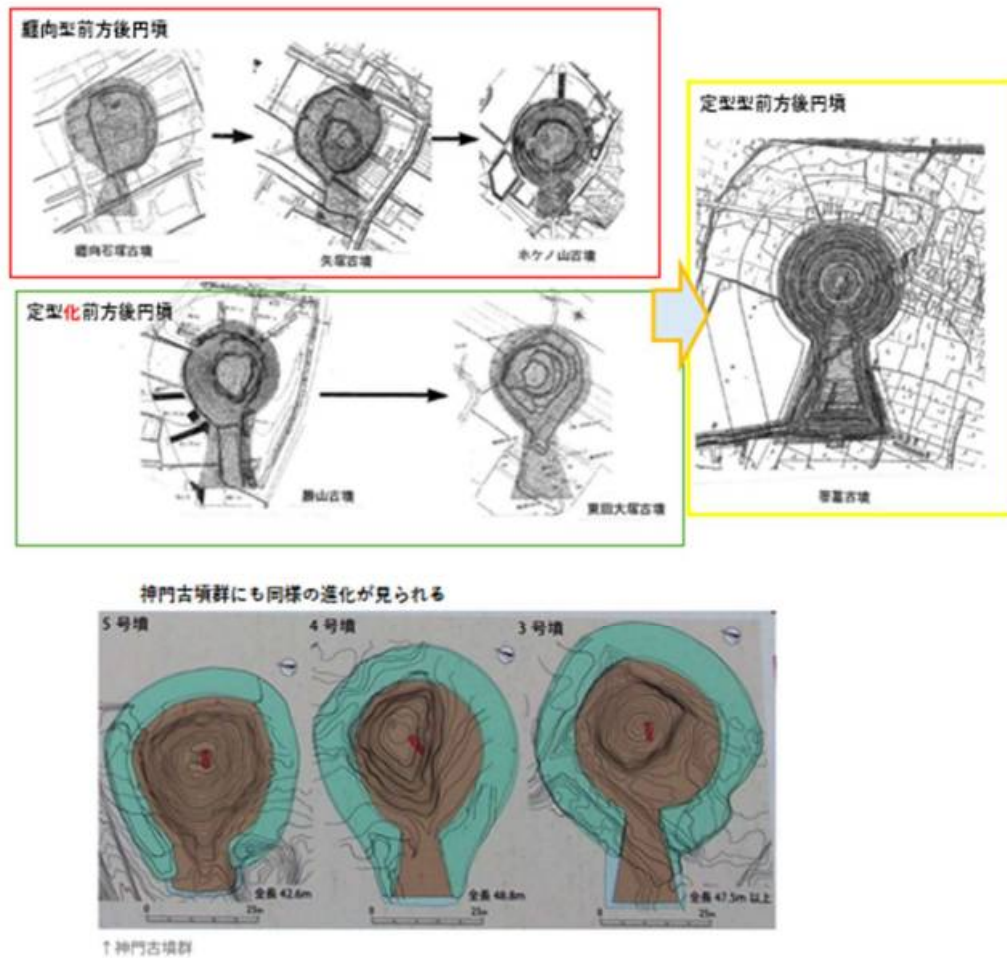
同時期、ヤマトでも初期の大型前方後円墳（纏向型前方後円墳）が連続して築造されており、これが、「ヤマトにおける前方後円墳の起源」を示すのに対し、神門古墳は「その様式がヤマトから地方へ伝わった」ことを示している。また、ヤマトでは、纏向石塚古墳⇒勝山古墳⇒箸墓古墳へと前方後円墳の定型化が進んだが、同じように、神門古墳も5号⇒4号⇒3号へと定型化が見られる。このことから、神門古墳の首長が代々ヤマトと政治的交信を行っていた可能性が考えられる。

前方後円墳はヤマトを象徴する築造物で、その勢力拡大の軌跡を示すと考えた場合、神門古墳の首長は、卑弥呼の威光を示すべく、代々纏向の流行を取り入れた古墳を築造し続けたのではないだろうか。そして、3代で古墳造りを終えたのは、247年に卑弥呼が亡くなったことと関係しているように思われる。

2026年10月1日

テーマ：海上氏族の出現と変遷

前方後円墳の定型化 纏向古墳群と神門古墳群の比較



この時代、既にヤマトと養老川流域を結ぶ交通ルートが構築されていたと考えられ、後のヤマト王権の東方遠征軍はこのルートを辿ったと思われる。

第3章 海上氏族の誕生（想像）

6世紀、全国に国造が配置された中で、房総を含む関東には、上海上国造、下海上国造、伊弉国造、菊間国造、无邪志（むざし）国造、相武（さがむ）国造といった天穗日命（あめのほひのみこと）の後裔を名乗る出雲系の国造が多い。

これは、出雲系の人々が海流に乗って早くから関東に到達していたからかもしれない。あるいは、ヤマト王権の東方遠征前に傘下に入った出雲の豪族らがこの遠征に加わっただけでなく、遠征によって服属させた関東について、在地豪族を管理し、クニを運営するという

2026年10月1日

テーマ：海上氏族の出現と変遷

困難な役目を与えられ、その役務を果たした結果とも思われ、後にヤマト王権から派遣された者も含め、出雲系の国造が多くなったのだと思う。

この章では、このような視点からヤマト王権の東方遠征と海上氏族の誕生について想像してみたい。

3. 1 ヤマト王権の東方遠征

邪馬台国の後、政権を得たヤマト王権は、有力豪族たちとの連合体（ヤマト連合）を形成し、北九州から瀬戸内、出雲、近畿周辺の政治勢力を傘下に加えると、4世紀初めから本格的に東国に進出し、各地の豪族を服属させた。

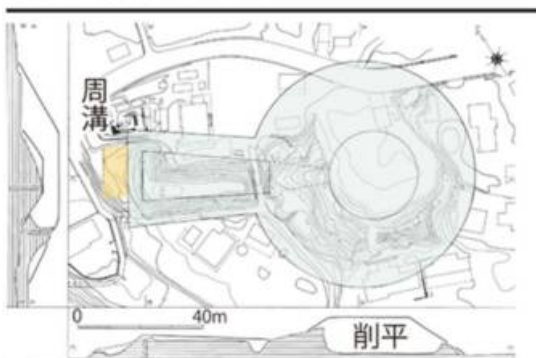
ヤマト王権の東方遠征軍は、既に存在していたヤマト⇒走水⇒房総のルートを進んで、最初に養老川流域に到達したと考えられる。

彼らは、養老川の左岸地域に拠点を構え、中央から人や鉄製の武器や農具を持ち込み、養老川流域を統一して東北遠征の前線基地を構築した。その役割を担ったのが出雲系と言われる海上氏族の祖先（仮に「K氏族」とする）であったと考えられる。

3. 2 海上氏族の誕生

K氏族は、ヤマト王権の権威を背景にもともと豊かで人やムラが多かったこの地域を支配下に入れることで、一気に動員力を上げることができた（軍事・土木工事等に動員）。また、もともと海運・水運に長けていた彼らは、後に海部（あまべ）と呼ばれる人々を支配下に加えて基盤強化をはかった。そして、養老川流域の首長（海上氏）となり、4世紀前半、ヤマト王権の象徴である前方後円墳（今富塚山古墳 110m）を築造した。本古墳の埋葬施設には木炭が使われていた（木炭槨）ことが分かっており、当時の最新技術が伺える。

今富塚山古墳 いまどみつかやま



今富塚山古墳の墳丘と推定復元形（永沼1992を改変）

2026年10月1日

テーマ：海上氏族の出現と変遷

3. 3 海上氏族の基盤形成

海上氏族は、姉崎に拠点置くことで東京湾に面した水運の要衝を抑えて広域展開をはかりつつ、東京湾から香取海へ至るルートを模索した。

- ① 安房を回って太平洋に出て、九十九里を経由して香取海に入る外洋ルート
- ② 当時は海面が高く、霞ヶ浦・印波域に大きく広がっていた香取海と今よりも内陸深く入り込んでいた東京湾、このふたつの巨大な水域を内陸の河川や湖沼を経由して結ぶ「古代の水上交通網」ルート

そして、ヤマト王権の東北遠征にあたって、海上氏族は、この航路ネットワークと水運力を提供し、円滑な軍事展開を可能にする一方、強力な水軍をもって、現地勢力との交渉や抵抗勢力を抑え込む等、遠征軍の中核的役割を担ったと考える。



遠征軍は、4世紀中頃には香取海に達し、さらに海を渡って常陸の奥にまで進軍した。この結果、4世紀後半以降、香取周辺や常陸にかけて前方後円墳が次々と築造された。

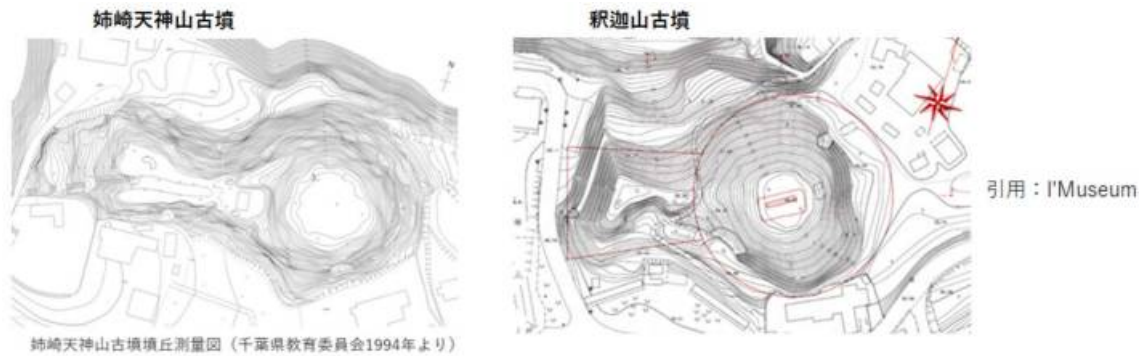
海上氏族は香取を次の東北への重要拠点と位置付け、同族をこの地の首長に置いた（後の下海上）のではないだろうか。

このように、海上氏族はヤマト王権の東国遠征に貢献することで、自身の地位を確立し、王権に服従した豪族たちを取りまとめることで、勢力を拡大した。当時のヤマト王権は、初期の東国経営を自ら行う力はなく、海上氏族を活用して間接的な支配を行ったと考えられる。

海上氏族は、ヤマト王権から大型墳墓を築くことを許され、4世紀中葉に姉崎天神山古墳（130m）、続いて釈迦山古墳（93m）を築造した。

2026年10月1日

テーマ：海上氏族の出現と変遷



第4章 海上首長連合（大海上国）

「先代旧事本紀」（せんだいくじほんぎ）の「国造本紀」（平安時代初期）では、成務天皇時に忍立比多比命（おしたてけたひのみこと）が海上国造に任命されたとされ、また、応神天皇の時代（4世紀後半から5世紀初）、忍立化多比命の曾孫である久都伎直（くずきのあたえ）が、下海上国造になったと記述されているが、6世紀の分断までは一つの「海上国」であったため、忍立比多比命が国造に任命されたとしたら、実際は「海上国の国造」であったであろう。

本章では、養老川流域に勢力基盤を持ちつつ独立的な地域首長連合の中核勢力であった海上氏族がヤマト王権から国造に任命されるまでを想像する。

4. 1 海上首長連合

ヤマト王権から国造として派遣された忍立比多比命は、海上氏族と同じ出雲系であり、在地勢力との融合が容易であったと思われる。

当時の海上氏族は、房総の有力勢力（後の菊間や伊甚）と連携する一方、香取の首長（後の下海上氏族）も香取海沿岸地域の首長との連携を拡大し、互いに首長連合、いわゆる「海上首長連合」（甘粕健説）or「大海上国」（原島礼二説）の中核を形成しており、千葉県中部から茨城県南部、そして埼玉県、東京都にかけての広域を影響下に置いていたと思われる。

また、養老川流域から霞ヶ浦南岸にかかる房総北半の豪族たちは、古墳に葬られる王者に石枕を副葬するという共通の祭祀を行っていた（沼澤豊説）。石枕の分布からこれを、海上首長連合の象徴だったのではないかとの説（甘粕健）がある。

2026年10月1日

テーマ：海上氏族の出現と変遷

石枕を伴う主な古墳

引用：古墳に眠る石枕 (財) 千葉県教育振興財団



海上首長連合の想定領域

引用：『古代東国の風景』厚島礼二



4. 2 海上国造

忍立比多比命の海上国造任命は、海上首長連合が正式にヤマト王権に組み込まれたことを意味するが、一方で、それまで広範囲に自由であった海上氏族の統治に対し、王権の統制が始まったとも考えられる。

5世紀前半から中頃に作られたとされる姉崎の二子塚古墳（114m）は、忍立比多比命の墓とも言われているが、香取の三之分目大塚山古墳（118m）と並んで、海上氏族の繁栄ぶりが伺える。



姉崎二子塚古墳 - Wikipedia



直弧文石枕 (ちょっこもんいしまくら)

引用：i'Museum HP

第5章 ヤマト王権の中央集権化と地方支配

5世紀（倭の五王の時代）になると、ヤマト王権は中国の南朝（宋）へたびたび朝貢を行

2026年10月1日

テーマ：海上氏族の出現と変遷

い、「倭国王」などの称号を得て権威を誇示し、朝鮮半島での軍事的な優位性を確保する一方、国内では大王の権威を絶対的なものにしようとした。

本章では、ヤマト王権が中央集権化を目指す中で、地方豪族との関係性を変えていったことを述べ、併せて、海上氏族の動向について想像したい。

5. 1 ヤマト王権の地方支配

ヤマト王権は、国内の物資や兵力を王権に集約させ、強力な国家を作るべく、中央集権化を目指したが、この結果、地方の有力豪族との関係はそれまでの同盟的な関係から、王権による支配と服従の関係へと変わる。すなわち、有力豪族は国造等に任命され、氏や姓（臣・連・君・直・首・造・史など）を与えられることで、王権の体制に組み込まれ、序列化されていく。そして、国造は、王権に物資や労働力を貢納し、軍事的な奉仕を行うことになった。

そして、逆らう地方豪族に対しては介入が行われ、屯倉（みやけ）の設置などの力をそぐ政策が行われた。

こうして、5世紀後半、ヤマト王権は九州中部から関東および東北の南部にいたる地域に支配権を広げていった。その根拠となるのは、埼玉稲荷山古墳出土鉄剣と江田船山古墳出土鉄剣の銘文に刻まれた雄略（ワカタケル大王）を表す文字である。



5. 2 海上氏族の動向

「国造本紀」によれば、海上国造は、檜前（ひのくま）の氏と直（あたい）の姓を与えられたとされ、任命地の統治権を得た代わりに、王権の命に従って物資や労力を貢進する役割を担わされ、王権の体制に組み込まれていった。

2026年10月1日

テーマ：海上氏族の出現と変遷

また、ヤマト王権は、地方豪族の子女の出仕制度（韃負、舍人、采女など）を導入し、ヤマト王権の権力強化と親王権教育による王権への服属意識を高めた。また、国造配下の中小豪族との直接的な関係を築くことで、海上はじめとした有力国造の求心力を段階的に弱めていった。稲荷台1号墳の豪族に与えられた「王賜銘鉄剣」からも王権と地方豪族との直接的な関係が伺える。

二子塚古墳以降、海上氏族の首長にふさわしい大型の前方後円墳が作られなくなったことから、海上首長連合のような地方の連合勢力は、その自立性を失っていったものと思われる。

第6章 海上国の分断と小国の分立

6世紀、総の国には、11もの国造が配置されていたとされ、小国がひしめく地域となった。本章では、かつて、広域に影響を与えていた海上国造が、上海上と下海上に分かれ、やがて、1地域の国造として律令国家の時代を迎えるに至った経緯について考察する。

6. 1 新興勢力の台頭と海上国の分断

6世紀に入ると、九十九里浜一帯にのちの武社国造につながる氏族が進出する。彼らは、大王の外戚である和珥(わに)氏を後ろ盾にその勢力を拡大した。

また、現在の印旛沼や手賀沼周辺には、印波国造が勢力を伸ばし、下総国千葉郡にかけては、後の千葉国造が現れた。

こうして、海上首長連合は、四分五裂することとなり、これを率いた海上氏族も、上海上と下海上に分離し、やがて、養老川流域を治める上海上国造へと転身した。

このような海上氏族の弱体化の背景にはヤマト王権と中央豪族の思惑があったと思われるが、記録はなく、事実是不明である。

しかし、「続日本後紀」によれば、6世紀初頭に物部連小事(もののべのおごと)が朝廷の命を受けて坂東(関東地方)へ出兵し、これを平定した功績によって、匝瑳郡(そうさぐん)を建てたとある。匝瑳郡は海上氏の支配域だったことを考えると、この出兵が海上国と何らかの関係があったと考えられ、当時、ヤマト王権の介入を許すきっかけとなる事件があったのではないかと考えてならない。

雨宮龍太郎氏が「古代東国の交通網」の中で、その様子を述べられており、事実は別として、合点を得ることができたので、以下その要旨を記載する。

2026年10月1日

テーマ：上海上氏族の出現と変遷

- ① 海上国造と印波国造の間に武力衝突が発生し、劣勢の印波国造は橘花屯倉(川崎市)を通じて、ヤマト王権に急を告げた。
- ② ヤマト王権は、これを機に軍事介入を行い、海上国造の勢力を削ぎ、王権直轄勢力を扶植すべく、物部連小事を含む遠征軍を派遣した。
- ③ 6世紀後半の始め、物部連小事軍が常陸にまで侵攻した。

ヤマト王権軍と海上国造との間に軍事衝突があったかどうかは不明だが、この結果、海上国造の手薄な地域に王権のクサビが打ち込まれることになった。クサビはやがて武社国造となり、印波国造と共に勢力を伸ばして、九十九里ルートを遮断するように割り込んだ結果、海上国は上海上と下海上に分断され、支配域を縮小していった。

以上のヤマト王権による介入と海上国の分断は6世紀前半から中葉にかけて起こったのではないかと考える。

下海上の首長墳と思われる城山1号墳(68m 前方後円墳、6世紀中葉)から古い三角縁神獣鏡が出土したが、「古代東国の交通網」によれば、これは、海上国が分断する前に上海上国造から下海上国造に与えた形見のようなものだったかもしれないとのこと。

城山一号墳出土の三角縁神獣鏡



引用：千葉県教育委員会HP

3世紀の古い銅鏡で、300年以上贈与と保管を繰り返してから城山1号墳の被葬者の副葬品として埋納されたと思われる

6世紀の上海上の奥津城としては、山王山古墳(69m)、原1号墳(70m)、鶴窪古墳(60m)があるが、一方で、馬来田や須恵では、100m級の前方後円墳が作り続けられており、勢いの差を感じる。「古代東国の交通網」の中で、雨宮氏は、武社の兵力や土工については、馬来田地域から供与が行われたと推察している(根拠は土器の移動)。

2026年10月1日

テーマ：上海上氏族の出現と変遷

6. 2 総の国の国造

『帝王編年記』(鎌倉時代の歴史書)では、534年、上総国が成立したとされるが、実際に成立したのは、大化の改新以降だったと言われている。

総の国については、上総に8つの国造(上海上、須恵、馬来田、伊甚、武社、菊麻、阿波、長狭)、下総に3つの国造(下海上、印波、千葉)が置かれ、小国が乱立することになった。

この段階では、まだヤマト王権の直接的な統治は行われておらず、地域の有力豪族が国造に任命され、領域支配を行っていた。

607年(推古天皇15年)に各国へ屯倉(みやけ)が置かれた。屯倉の任務は、国造の監視と牽制、更に、国造領域の確認と領民の所在地、人口調査であり、来るべき評制施行の準備段階と言える。

房総における国造の分布図



引用：千葉市地域情報デジタルアーカイブ

第7章 律令国家における上海上氏

大化の改新を経て、ヤマト王権は、天皇を中心とした中央集権的な律令国家の建設を目指した。特に、豪族による土地や人の私有を廃止し、国が直接管理すべく、各種政策(公地公民、税制改革、戸籍と班田収授等)を打ち出すとともに、国造域を分断・再編成し、新たに「国・評(こおり)・里」の行政区画を置いた。

本章では、律令国家成立の中で、上海上国造がどのように体制に組み込まれ、存続してい

2026年10月1日

テーマ：上海上氏族の出現と変遷

ったかについて考察したい。

7. 1 上総国の成立

699年の藤原京出土の木簡に「上掾（かみつふさ）国」との記述あり、上総国になる過渡期とされている。律令制度が整備されてくると、総の国は上総国と下総国となり、上総国には15評（こおり）が置かれた。

上総国には国司が派遣されて、地方政治を管掌する一方、国造は郡司（地方行政官）となることが多かった。郡司は、終身官であり、世襲が容認されていたが、保証されているわけではなく、推挙権を持つ国司に逆らえなくなった。

上海上国造は、海上評の長官となり、養老川左岸（南西部）一帯の地を任された。

701年の大宝律令の制定によって、評は郡に変更となり、海上郡が設置された。

国郡の配置図



7. 2 海上郡司

708年に上総国府が開設される中、海上郡司は、小折に郡衛（ぐんが）を置いたとされている。当時の郡は、有する里（郷）の数に応じて、5等級（大郡・上郡・中郡・下郡・小

2026年10月1日

テーマ：海上上氏族の出現と変遷

郡)にランク分けされており、8郷(佐是・稲庭・大野・山田・倉橋・福良・島穴・馬野)を有する海上郡は、中郡に位置付けられた。

海上郡は、養老川流域の肥沃な土地を基盤に、豊富な農産物や海産物、麻などの特産物を有しており、海上郡司は、上総国司の下、税の徴収や保管、戸籍の管理、治安維持等の行政実務を担った。

海上郡衙の推定地とされる西野遺跡群からは、大規模な掘立柱建物や格式の高い井戸、厨(くりや)等の遺構が見つかっており、ここが周辺の物資を集積・管理する拠点となっていたことが伺える。

郡衙のイメージ図



郡司には、給与地として国から一定面積(大領で6町など)の職分田(しきぶんでん)が支給され、出挙(すいこ)による利息収入とともに実質的な収益基盤となっていた。また、海上郡司は、東京湾内海や内陸の養老川流域を結ぶ流通において、日常的に海船を運用できる技術と水運力を有していたと思われ、おそらく安定的な経済力を持っていたと思われる。

7. 3 海上郡司と仏教

6世紀に百済から伝わった仏教は、中央集権国家を目指すヤマト王権の思想基盤となり、中央から地方へと急速に広がっていった。646年に薄葬令が出されると、豪族たちは古墳造りを止めて、寺院の建立へと移行していった。624年には、全国に46の寺ができ、更に692年の時点では、545の寺があったと伝えられている。

上総国でも7世紀後半から寺院の建立が始まる中で、海上郡司は、一族の郡寺として今富廃寺を建立した(7世紀末～8世紀初)。今富廃寺については不明な点も多いが、海上上国造から続く海上郡司の勢力の象徴であり、塔を備えた本格的な伽藍を持つ寺院であったと

2026年10月1日

テーマ：海上氏族の出現と変遷

想像される。その軒丸瓦文様から山田寺の流れをくんでいたことが伺える。

今富廃寺の軒丸瓦文様



引用：I'Museum

伝奈良県山田寺単弁八弁蓮華文軒丸瓦

奈良国立博物館



741年、聖武天皇は「国分寺建立の詔」を発し、国毎に金光明四天王護国之寺（国分僧寺）」と「法華滅罪之寺（国分尼寺）の建立を命じた。しかし、地方にとって国分寺は未曾有の巨大寺院であり、国司の怠慢や力不足もあり造営事業は滞った。

747年、朝廷は「国分寺造営督促の詔」を発し、郡司や在地豪族に本事業への協力を求めた。すなわち、3年以内に国分寺の塔、金堂、僧房を造営すれば、郡司の世襲を認めると確約したのである。結果、国分寺の造営が一斉に進展することになった。

上総国分寺は、756～757年頃に主要伽藍が完成したとされている。国分僧寺や尼寺の遺跡から出土した墨書土器や文字瓦等から郡司らが上総国分寺の造営に関わっていたことが推察される。

海上郡に関わる墨書土器や文字瓦も発見されている。

- ① 墨書土器：「海上厨（くりや）」＝海上郡が管理・運営する食料供給施設（坊作遺跡出土）
- ② 文字瓦：「海上」、「馬」＝海上郡馬野郷（祇園原瓦窯跡出土）

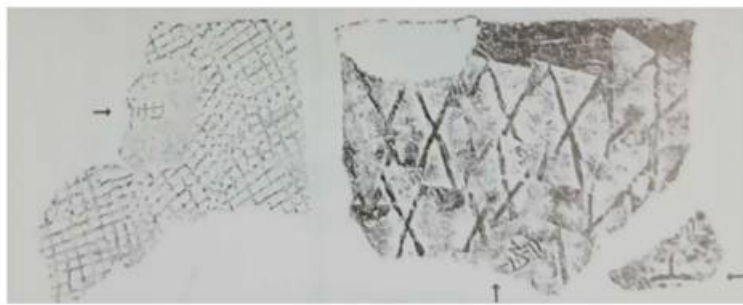
国分尼寺遺跡の墨書土器「海上厨」

引用：I'Museum
坊作遺跡出土



「海上」や「馬」の裏文字を凸面に印刻した平瓦

引用：「ならび建つ国分僧寺・尼寺」
祇園原瓦窯跡出土



2026年10月1日

テーマ：上海上氏族の出現と変遷

これらの遺物から、海上郡司が国分尼寺の造営や運営に寄与していた事実が伺える。

平城京東院地区から発掘された「上海上内侍」と書かれた天平年間の木簡から海上郡司の一族の娘が内侍司に勤務していたことが分っている。内侍司は、天皇の身の回りの世話や宮中の命の伝達を担う後宮の重要機関であり、彼女は光明皇后の側近として仕えていた高級女官と思われる。

光明皇后が強く望んだ国分尼寺の造営に関して、海上郡司が協力を惜しまず、結果、最大規模の尼寺が建立されたことには、両者の関係性と海上郡司の思惑があったものと思われる。

「上海上内侍」と記載の木簡



引用：奈良文化財研究所

本木簡には、上海上内侍が物資（黒葛等）のやり取りを指示・受領していたことが記録されている

あとがき

海上氏は、4世紀のヤマト王権による東北遠征のなかで頭角を現し、遠征後の房総や常陸南部地域をヤマト王権に代わって統治することで、影響力を拡大した。

しかし、ヤマト王権の中央集権化と地方豪族への統制強化の中で、支配域を縮小して上海上国造となり、やがて律令国家体制の整備が進むと、上総国の海上郡司として国司に仕えていくことになった。

2026年10月1日

テーマ：上海上氏族の出現と変遷

767年、上総国海上郡出身で位階「外従五位下」、「隼人正(はやひとのかみ)」を務めた檜前舍人直建麻呂(ひのくまのとねり あたい たけまろ)が朝廷より「上総宿禰」の姓を賜ったとの記録がある(続日本記)。「宿禰(すくね)」とは、「八色の姓(やくさのかばね)」の第3位に位置づけられ、朝臣(あそみ)に次ぐ高い地位である。

5世紀後半以降にヤマト王権が豪族たちの地位や職能を示すために運用した制度

古代日本の「姓(かばね)」の階級序列

朝廷における代表的な身分秩序は以下の通りです。 AD640

序列	姓(かばね)	主な対象・役割
上位	臣(おみ)	中央の有力豪族(葛城、蘇我、阿倍など)
	連(むらじ)	中央の職掌豪族(大伴、物部、中臣など)
中位	君(きみ) / 公	有力な地方豪族や皇族の一派
	直(あたい)	地方の豪族・国造(くにのみやつこ)
下位	首(おびと)	小規模な地方豪族や領主(あがたぬし)
	造(みやつこ)	技術者や特定の職務を担う人々
	史(ふみひと)	渡来人の一族など

八色の姓(やくさのかばね)は、684年に制定された古代日本の新しい身分・姓(かばね)の制度

八つの姓(上位から順に)

従来の「臣(おみ)」や「連(むらじ)」に代わり、以下の8つの姓が序列化されました。 高崎経済大学 +1

1. 真人(まひと)：主に皇族に与えられた最も高貴な姓。
2. 朝臣(あそみ / あそん)：有力な貴族・豪族に与え際立って重視された姓。
3. 宿禰(すくね)：武力や技術を持つ豪族に与えられた姓。
4. 忌寸(いみき)：主として特定の祭祀や渡来系の氏族に与えられた姓。
5. 道師(みちのし)：特定の専門的知識や道教・仏教的な役割を持つ者に与えられた姓。
6. 臣(おみ)：従来の臣を再編したもの。
7. 連(むらじ)：従来の連を再編したもの。
8. 稲置(いなぎ)：地方の豪族や小規模な役人に与えられた姓。 刀削ワールド +3

上海上国造の子孫が都で活躍して昇進し、「上総の宿禰」の姓を賜ったことは、海上郡司の一族にとって、大変誇らしいことであつたと思われる。

<参考文献・資料>

- 古川 庄次「房総の古代・上海上氏族」 (株)国書刊行会 (2010/9/20)
- 前之園 亮一「上海上と下海上」
- 原島 礼二「古代東国の風景」 吉川弘文館(1993/3/10)
- 石井 進、宇野 俊一「千葉県の歴史」 明和印刷(株) (2000/7/28)
- (財)千葉県史料研究財団「千葉県の歴史 通史編 原始・古代Ⅰ」 (2007/3/28)
- 雨宮 竜太郎「古代東国の交通網」「研究連絡誌 71」 千葉県教育振興財団 (2010/2/01)
- 須田 勉「ならび建つ国分僧寺・尼寺 上総国分寺」 新泉社 (2022/9/20)
- 三木 茂治「姉崎古墳群」 姉崎公民館公開資料

古代日本の動向&房総・上海上氏族のまとめ年表

引用：「房総の古代・上海上氏族」古川庄次、「古代東国の風景」原島礼二、「千葉県の歴史 通史編 原始・古代Ⅰ」（財）千葉県史料研究財団、「千葉県の歴史」石井進・宇野俊一、「姉崎古墳群」三木茂治、「上海上と下海上」前之園亮一、「古代東国の交通網」西宮竜太郎 他

2026年10月

Takahashi

世紀	中央の動向	海外の動向	房総と上海上の動向・・書香からの抜粋列挙と想像含む	主な古墳（姉崎中心）
前	3000年前（縄文晩期・紀元前10世紀）に水稻の稲作農法が北九州に伝わり、弥生中期には南関東にも伝播する。定住化（ムラの形成）が進むと、テリトリーをめぐって争いがおこり、環濠集落が形成される。 弥生時代：早期BC1000～BC500年、前期BC5世紀～BC2世紀。中期BC2世紀～AD1世紀、後期 1世紀～250年 前50年頃、倭人が朝鮮東南部に侵攻 前33年漢と通交「それ案浚海中に倭人あり。別れて百余国となす。歳時をもって来りて献見す。」（漢書 地理志燕地条）	漢が朝鮮に衛氏朝鮮を建てる 前108年、中国の漢の武帝が衛氏朝鮮を滅ぼした後に案浚郡を設置（平壤付近）	縄文文化が根強く残っていたが、東海地方から運ばれた前期弥生土器などから交流のあとも見られる 弥生中期後半（紀元前1世紀～紀元後 1 世紀） 東京湾岸平野部や養老川、村田川等の河川流域に水田が開発され、環濠集落が形成される	方形周溝墓が盛んに作られる
	1世紀	57年「漢委奴国王」印を受領	弥生後期（50～150年頃）、農業生産の増加による人口増により環濠を超えてムラの規模が拡大する（環濠集落の解体）	
2世紀	107年倭面土（イト）国が後漢に謁見を願う 列島西部連合（北九州と吉備等）が東進し、勢力拡大（近畿、北陸、東海）、一方、出雲系も北陸・信越や関東への進出を進める 吉備：岡山県金次と広島県の東平城を含む広大な地域をさし、古墳時代には、ヤマト王権と肩を並べるほどの強大な政治力を持っていた 2 世紀中葉～後半 倭国大乱 ：100余のクニが30余まで統合された（中国の世界観「九州」、「四海」、「四荒」の内「四海」までの範囲の話） 中平（184～188年）銘の太刀（東大寺山古墳出土）：近畿に漢と接触できる勢力が出現したことを表す ⇒和珥氏の祖先 190年頃 邪馬台国の卑弥呼が女王となる ・・30カ国が連合国家を形成	2世紀中葉、高句麗の勢力が強くなる この時期中国側には倭からの朝貢の記録はない	弥生終末期 移住者も含め、人口が増し、ムラの数が増え、規模も拡大する/土器や小銅鐸、鉄剣などから東海や西日本、北陸との交流や人の移住が伺える。 大きなムラでは首長を中心に階層が分化する。 倭国の大乱の影響：東京湾西地区にはその影響が見られるが、房総までは影響が及んでいない。房総は、比較的平和で、食糧事情が良く、他地域からの移住者が増えてムラの数が増発的に増える。 ムラの規模も拡大し、数百軒単位のムラもできる 例：草刈遺跡	方形周溝墓が急減する（被葬者が高位者に限定） 首長墓の形成・・鉄剣やガラス玉を持つ人物の墓
3世紀	卑弥呼 239年、243年、247年、魏（or帯方郡）に遣使朝貢。「親魏倭王」印と銅鏡100枚を授与される。 卑弥呼は魏の権威を背景に各地の有力勢力に魏を配布して同盟強化を図った 纏向遺跡（まきむく）に纏向石塚墳ができる（96m）、ホケノ山古墳（90m）⇒ 纏向型前方後円墳 ・古墳時代出現期 卑弥呼 狗奴国（肥後国or 東海地区等諸説あり）と戦争 247年、卑弥呼死す / 倭百歩余の墳墓造る 男王が立つも紛争おさまらず、13歳の台与を立てる 266年、台与 西言に朝貢 3世紀後半、280mの箸墓古墳（ 定型型 前方後円墳 ）ができる⇒古墳時代前期 ヤマトで男王が立ち、武力と政治力を持って豪族を従えていく 出雲勢力がヤマト王権の連合の傘下に入る。⇒航海や製銅・鉄技術、祭祀を持つ出雲系氏族は、ヤマト王権の勢力拡大の中で貢献した	202年後漢滅亡⇒中華 三国時代 204年公孫度が案浚郡の南半分をさいて帯方郡とし、倭・韓これに属す 中国の「梁書」に男王が中国の爵位授記の記載有	養老川、村田川、小櫃川流域が、東京湾を経由して最も強く西日本の影響を受けていた/他地域からの移住者が増える一方、房総から東関東や東北北地域への進出が伺える 中央からの氏族集団が養老川の台地を訪れ、定住し、3代に渡って首長となり、神門古墳を作る（黎明期ヤマト王権の拠点的支配） 纏向石塚古墳が「ヤマトにおける前方後円墳の起源」を示すのに対し、神門古墳は「その様式がヤマトから地方へ伝わった」ことを示す ヤマトで纏向石塚古墳⇒勝山古墳⇒箸墓古墳へと定型化が進むように、神門古墳も5号⇒4号⇒3号へと定型化が見られる。副葬品も含め、これは、神門古墳の首長が代々ヤマトと政治的交友があったことを示す 前方後円墳はヤマトを象徵する建造物で、その勢力拡大の軌跡を示す この時代にヤマトから養老川流域までの交通ルートが構築されていたと考えられる 阿波忌部氏（あわいんべし）が旧安房国へ移住し、麻の栽培を伝える	神門 5号、4、3 号墳 （纏向型前方後円墳） 小櫃川流域：高部30号墳、32号墳（いずれも30m級の 前方後円墳 だが、漢or三国時代の魏が出土 参考：前方後円墳：5200基・西日本中心、 前方後円墳 450基・東海や東日本中心・弥生時代の方形墓から発展したものの・短期間で消滅、狗奴国関係国の墳墓という説もあり 参考：姉崎東原B29号古墳（33m）姉崎東原遺跡群で発見された 前方後円墳
4 世紀	ヤマト王権をとりまく中枢勢力（ヤマト連合）による拡大路線が始まる 東西遠征 が繰り返し行われる（日本武尊の遠征はその象徴） 大和、柳本、箸中、鳥見山の4つの王の墓群があり、これは王位が特定の集団から順繰りに選出されたことを表す 大和盆地（桜井・纏向周辺）を拠点とした初期王権「イリ」勢力に代わり、4世紀後半からは畿内周辺勢力「ワケ」と連携した王権「タラシ」勢力が軍事力を強化して地方支配を強め、鉄を含む権益確保のため新羅遠征を行った 解説：「イリ」系譜：ヤマト王権の初期王権、王の名に「イリ」が含まれる。「タラシ」系譜：4世紀後半～5世紀頃、王の名前に「タラシ」を持つ。「ワケ」：4世紀から6世紀にかけてのヤマト王権において、主に皇族や有力豪族の首長に与えられた称号 王領「県」を畿内や西日本に設定していく 成務 （倭建命の異母兄弟）朝時に山河を隔てして国県を分ち、国郡（くにこのり）・県邑（あがたむら）を定め、それぞれに国造（くにのみやつこ）・稲置（いなぎ）等を任命したとされる 5大勢力：和珥氏（奈良北部）、葛城氏（奈良西部）、河内・和泉の王族、吉備氏	336年、遼東に前燕王国 342年、前燕が高句麗を襲って首都を落とし、服属させる 345年、高句麗將軍の仇台が百濟を建てる 356年、新羅が独立 369年百濟で 七支刀 が作られ、ヤマト王権に贈られる（百濟と倭の連携） 369年、百濟・高句麗衝突。一方、 倭 が新羅を討って、 任那 の大半を支配下とする 371年、百濟が高句麗を討って、案浚太守に任命される 375年、高句麗が百濟に侵攻 387年、東晋より百濟王の称号を得る 391年、帯方郡がなくなる 397年、 倭 が百濟との同盟強化 百濟の王子を人質として送る	ヤマト王権の東北遠征は、まず、既に設定されていたヤマト⇒水走⇒房総のルートを辿って、養老川流域に到達したと考えられる。 ヤマト王権の東征軍は養老川の左岸地域に拠点を構え、中央から人や技術、鉄製武器や農具を持ち込み、養老川流域を統一し、東北遠征の前線基地を構築した。その役割を担ったのが出雲系と言われる海上氏の祖先（仮に「 K氏族 」とする）と考えられる K氏族 は、ヤマト王権の権威を背景にともともと平和で人やムラが多かったこの地域を支配下に入れることで、一気に動員力を上げる（軍事・土木工事等に動員）ことができ、また、後に海部（あまべ）と呼ばれる人々々々を組織・統率し、水上交通を掌握することで、広域展開をはかった。こうして、養老川流域の首長（海上氏）となり、4世紀前半に今富塚山古墳を築造した 海上氏族は、現在の東京湾側（市原市周辺）から香取海・鹿島方面へ抜ける水上交通ルートを開拓した。ヤマト王権の東国遠征にあたり、この航路ネットワークと水運能力を提供し、円滑な軍事展開を可能にする一方、強大な水軍（海上勢力）をもって、現地勢力との交渉や抵抗勢力を抑え込む等、遠征軍の中核的役割を担った。 遠征軍は、4世紀中頃に香取海に達し、さらに海を渡って常陸の奥に進ま進軍した。海上氏族は香取を次の東北への前線基地と位置付け、同族（後の下海上）をこの地の統治者に置いたのではないだろうか？ 海上氏族はヤマト王権の東国遠征に貢献することで、自身の地位を確立し、王権に代わって服従した豪族たちを取りまとめることで、勢力を拡大した。こうして、東国経営の実務を担うことでヤマト王権の東国支配に寄与した 海上氏族は、王権に準ずる巨大な墳墓を築くことを許され、4世紀中葉に姉崎天神山古墳（130m）、続いて釈迦山古墳（93m）を築造した。 解説：海部（あまべ）とは、ヤマト王権の命により、漁業や航海技術で奉仕した部氏（集団）であり、上海上氏は海部を率いて、東京湾岸や海上・内海を支配していた。（想像）東京湾から当時の利根川等を通して埼玉方面まで行ったり、河川や湖を経て香取海へも進出した利根かもしれない。 成務天皇時、 忍立化多比命 （おしたてけたひのみこと）が上海上国造に任命される / 海上首長連合が正式にヤマト王権に組み込まれた / ヤマトから派遣され、在地の海上氏族と同化していったと考えられる 応神天皇の時代、 忍立化多比命 の曾孫である 久都伎直 （くずきのあたえ）が、下海上国造になる	今富塚山古墳 （110m前方後円墳）4世紀前半、埋葬施設に木炭が使われている 天神山古墳 （130m前方後円墳）4世紀中葉：海上氏族は大型古墳を作ること、自身の権力を周辺地域に示した 左記遠征の結果、 栗山川の上流域・香取海沿岸・常陸の豪族が支配下に入り、4世紀後半～末に前方後円墳が多数つくられた 4世紀後半、村田川流域に大覚寺山古墳（63m）が築造されており、蜀岡の祖先が出現した 釈迦山古墳 （93m前方後円墳）4世紀後半 同時期、小櫃川にも下流域に手古塚(60m)、坂戸神社（63m）、中流域に80～100mクラスの前方後円墳が作られる（飯塚渡（いづづか）、白山神社、箕輪送間神社）⇒馬来田のクニの出現 4世紀末の一宮川流域における油殿1号墳と能満寺古墳の出現は、伊賀のクニの出現を表す
5世紀	倭の五王（讃・珍・済・興・武）が、東晋、宋にたびたび遣使貢献を行った。目的は、高句麗への対抗。 「讃」を仁德天皇、「珍」を反正天皇、「済」を允恭天皇、「興」を安康天皇、「武」を雄略天皇と推定 413年、倭王讃、東晋に使いを送る 421年、倭王讃（仁德天皇か）宋に使いを送る 438年、倭王珍（反正天皇か）宋に使いを送る 氏族制度、豪族の子どもの仕度制度（取負（ゆけい）、舍人、采女（うねめ）など）を導入し、王権による地方の直接支配をはかった。 また各郡部民（職業集団）を編成・支配していった。 443年、倭王済（允恭天皇か）宋に使いを送り「安東將軍倭国王」の称号を授けられる	400年、 倭 ・百濟は新羅に侵食し、高句麗と戦う 402年、新羅王子を人質として倭に送る 404年と407年に 倭 は百濟と組んで高句麗に攻め込むも敗戦する 418年、百濟、倭に白狼 1 0 匹送る 北魏が華北を統一（439年）、南では東晋に代わって宋が成立 442年、 倭 が2度新羅に侵攻する。 倭 への移住者増	5世紀、上海上氏族は香取の首長（後の下海上氏族）と共に「 海上首長連合 」（甘粕健説）を形成し、千葉県中部から茨城県南部、そして埼玉県、東京都にかけての広域を支配した / 上海上氏族は、房総の有力勢力（後の蜀岡や伊賀）と連携する一方、香取の首長（後の下海上氏族）も香取海沿岸地域の首長との連携を拡大し、互いに首長連合の中核を形成していく / 上と下の海上国は、切り離されているが、かつては同じ領域の、地続きの「大海上国」があったのが、のちに分断されたためと考えるのが自然であろう。そして、石枕分布圏をそれに重ねてみると、それは千葉県東北部全域から霞ヶ浦南岸に達する広大な規模となる。まさに大海上国とよぶにふさわしい「古代東国の風景」原島礼二 上海上から霞ヶ浦南岸にかかる房総北半の豪族たちは、古墳に葬られる王者に石枕を副葬するという共通の祭祀を共有していた（沼澤豊）。石枕の分布からこれを、海上首長連合の象徴とした（甘粕健）、石枕の時期は5世紀前半から100年間 5世紀前半まで、上海上氏は上総地域に勢力基盤を持ち、独自の海上ネットワークや首長権を維持して独立的な地域連合の中核勢力であった/ 王陽銘鉄剣 ：被葬者は允恭天皇の刑部（おさかべ）として長年仕えた人だった人か？あるいは、左記新羅出兵で戦功を挙げた人か？	二子塚古墳 （114mの前方後円墳）忍立比多比命の墓か？豪華な副葬品(石枕他) 香取に 三之分目大塚山古墳 （前方後円墳118m）が築かれる（下海上の最盛期） 小櫃川流域（馬来田）では、鏡子塚古墳（142m）飯塚大塚山古墳（100m）、小糸川流域（須磨）では内裏塚古墳（144m）等の大型前方後円墳が作られた この時期、東国各地に大型古墳が築造される。梵天山古墳160m・舟塚山古墳186m（茨城）、別所茶臼山古墳168m・天神山古墳210m（太田市）、浅間山古墳172m（群馬）、雷神山古墳168m（宮城）他 稲荷台1号墳（27mの円墳）の 王陽銘鉄剣

	462年、倭王興（安康天皇か）宋に使いを送る 463年、吉備氏の反乱　　吉備での超大型古墳（例：造山古墳360m 5世紀初）がなくなり、超大型古墳は近畿のみで作られるようになる（王権による吉備介入か？） 478年、倭王武（雄略天皇か）宋に国書を送り「安東大將軍倭王」の称号を授けられる/　121のクニを平定たと奏上している 雄略が外戚・葛城氏を滅ぼす/　中央豪族（大伴氏や物部氏）による東国介入 ヤマト王権と地方勢力との関係が変化（同盟関係⇒支配へ）/豪族連合政権から中央集権国家へ向かっていく（その背景には朝鮮半島情勢への危機感があった）	475年、高句麗が百済の王都漢城を陥落させる 倭への移住者増 477年、倭が新羅を攻める	ヤマト王権は、海上上氏のような有力豪族を国造に任命し、王権の支配体制に組み込み、序列化していく一方、国造の配下の中小豪族との直接的な関係を強化し、海上上氏の求心力を段階的に弱めていった 二子塚古墳の後、姉崎古墳の規模が縮小する。王権の介入による勢力抑制か？ 房総の北半分と常陸南部の豪族は、海上氏族を各頂点に頂きながら、比較的ゆるやかな結束を保っていたが、6世紀になると、常陸と上総では新興勢力が台頭し、朱祐盛衰がないままどんぐりの背比べ状態となっていく。そのまま6〜7世紀を迎えた結果、小国造ばかりの国となる（原島礼二）	471年、稲荷山古墳120m（埼玉県）の金錯銘鉄剣（きんさくくわいてっけん） 江田船山古墳（熊本県）の銀象嵌銘大刀（ぎんぞうがめいたいとう）
6世紀	502年、倭王武、梁から「征東大將軍」の称号を授けられる『南史』『倭国伝』 国造・屯倉（みやけ）・品部（しなべ）を設定し、王権による直接支配が進む。同時に、大伴、物部などの勢力も部民を設けて勢力拡大をはかる 古墳の規模が縮小し、横穴式石室古墳が広まる 中枢勢力の変遷：葛城氏⇒大友氏（任那運営の失敗）⇒物部氏⇒蘇我氏（6世紀） 527年、国造磐井の乱 磐井の乱以降、直轄地（屯倉）を増やし、地方支配・中央集権を強める 534年、武蔵国造の乱（笠原 使主（おみ）と小柝（おぎ）の争いに上毛野君小熊が絡んだ騒動）の鎮圧と屯倉の設置 534年、伊基屯倉の設置 百済から仏教が伝わる（538年説と552年説が有る） 540年、大伴金村の失脚（任那四県割譲の外交政策失敗の責任） 562年、欽明天皇が紀男麻呂を朝鮮出兵の大將軍を任命した（任那奪還目的）⇒失敗 587年、物部守屋が蘇我氏に滅ばされる　⇒蘇我氏の政権独裁 588年、朝廷が使者を派遣して諸国の境を調査した（東海道は穴人臣風）・588〜606年間は、在地豪族との緊張関係が最も高まった時期（南宮龍太郎） 593年、推古天皇が即位し、聖徳太子が政務を行う 594年、「三宝興隆の詔」⇒仏教が広まる	512年、任那四県割譲 527年、国造磐井の乱⇒朝鮮出兵が不可となる 562年、任那が新羅に奪われる（滅亡）⇒高句麗、百済、新羅の三国時代へ 589年、隋が中国を統一する 598年、隋が高句麗を攻める	海上上国造が「樟前舍人（ひのくまのとねり）」の氏を賜り、「直（あた い）」を称した（6世紀前半）/　直は姓の中で中位の階級 海上国造と印波国造の武力衝突が発生し、印波国造は橘花屯倉（川崎市）を通じてヤマト王権に助けを求めた。ヤマト王権は、軍事介入を決定し、物部連小事を含む遠征軍を派遣した（南宮龍太郎） 534年上総国が成立『帝王編年記』・・・史実としては確実ではない。実際の成立は大化の改新後で、当時は総（ふさ）の国であった。 534年、伊基屯倉の設置 6世紀後半の始め、ヤマト軍が下総国臣連郡に侵攻した（南宮龍太郎） 中央（和珥氏）から武社に進出した勢力（後の武社国造）が勢力を拡大する/武社・山辺郡を支配 印波・手賀沼地域に印波国造が勢力を伸ばす/船橋、市川、松戸、我孫子にかけても新勢力（後の千葉国造）が出現した 武社勢力の拡大により、海上国は、海上上・海上上に分離し、更に、四分五裂して、小国へと転落していく 下海上の城山1号墳（68m前方後円墳、6世紀中葉）から古い三角縁三線五獣鏡が出土したが、これは、海上国が分断する前に海上上国造から下海上上国造に与えた形見のようなものでは？（南宮龍太郎） 後の上総国には、海上上国造の他に、須恵国造、馬来田国造、伊基国造、武社国造、菊麻国造、阿波国造、長狭国造の8つがおかれた 後の下総国には、下海上上国造、印波国造、千葉国造の3つが置かれた こうして、大海上国は小国に分離してしまった。地域首長連合の分断と勢力交代策は、関東の王者たちを大王の臣下に再編成するための過程であった（原島礼二）	山王山古墳（69m前方後円墳、冠帽等副葬品が豪華） 原1号墳（70m前方後円墳） 原2号墳（詳細不明） 馬来田では、稲荷森古墳（100m）、金鈴森古墳（100m）　/　須恵では、九条塚古墳（103m）、三条塚古墳（122m）、稲荷山古墳（106m）等の大型前方後円墳が続いた
7世紀	603年、冠位十二階を制定し、翌年、憲法17条を發布する 606年、全国に屯倉を置く。屯倉の任務は、国造の監視と奉制、更に、国造領域の確認と領民の所在地、人口調査⇒来るべき評制施行の準備（南宮龍太郎） 607年、小野妹子を隋に使わす。「日出ずる処の天使」は中国冊封体制の拒否を表す（小野氏は、和珥氏の支流） 622年、聖徳太子死去 630年、第1回遣唐使 643年、山背大兄皇子一族が蘇我氏によって滅ばされる 645年、蘇我入鹿が殺される・・・乙巳の変（いっしのへん） 646年、「改新の詔」：中央集権・律令国家を目指す/公地公民、税制改革、戸籍、国造域を国・評・里（50戸）に編成 646年、薄葬令 647年、新位階制を数く 649〜653年、高向臣と中臣たちが常陸国で建評事業にあたる/旧来の国造の支配地を整理して「評（こおり）」を置くなど、行政区画を設定した。この後、本格的な建評が全国的に実施された（南宮龍太郎） 664年、防人を配備する 672年、壬申の乱 692年の時点では、全国に545の寺があった（624年の46から急増） 694年、藤原京	「隋書」倭国伝には、「クニ120人有り、」⇒国造120人 660年、百済滅亡 663年、白村江の戦い 668年、高句麗滅亡⇒新羅による朝鮮半島統一（676年） 690年、唐では則天武后が初女性の皇帝となる 698年、渤海の建国　高句麗の遺民とツングース系靺鞨（まっかつ）人らによって建国された	この時期、総の国は、まだヤマト王権の直接的な支配に入っておらず、地域の有力豪族が国造に任命され、地域支配を行っていた 律令制下、地方には国司を派遣して、地方政治を管掌させた。国造は郡司（地方行政官）となることが多かったが、世襲が保証されているわけではなく、推挙権を持つ国司に逆らえなくなった 653年、物部連小事の子女が香取海に進出し、信太郎（霞ヶ浦の南西側）を新設した（南宮龍太郎） 総（ふさ）の国は上総・下総の2国となり、上総国には15評（こおり）⇒（郡）が置かれた/蜀岡国造⇒市原評（後に国府が置かれる） 海上上国造⇒海上評の長官となり、養老川左岸周辺から鉅ヶ浦市付近を任された 海上上氏の支配域は、「大海上国」⇒「海上上国」⇒「海上郡」へと縮小 海上評司は、郡守（今富鹿寺）を建立した 699年、藤原京出土の木簡に「上掾（かみつふさ）国」との記述あり	壇頭古墳（45m前方後円墳） 六孫王原古墳（46m前方後方墳、横穴石室） 古墳時代の終焉　この後は重葬となる 古墳⇒寺院建築へ 上総大寺廃寺、今富鹿寺、二日市場廃寺、真行寺廃寺、光善寺廃寺、九十九坊廃寺、岩熊鹿寺が7世紀に建立された
8世紀	701年、大宝律令　　国郡里制が施行 710年、平城京 712年、「古事記」撰上 715年、郷里制（国→郡→郷→里）が施行 717年、養老律令 720年、「日本書記」完成 723年、三世一身法 729年、長屋王の変 735、737年天然痘の大流行　人口の1/3？を失う 740年、藤原弘嗣の乱 741年、「国分寺建立の詔」 743年、聖田永年私財法　747年、「国分寺造管督役の詔」 752年、東大寺大仏開眼供養 765年、道鏡が太政大臣禪師に就任 784年、桓武天皇は長岡京へ遷都した 794年、平安京	唐：玄宗の時代（712年〜756年）は、政治・経済・文化が最高潮に達した。シルクロードを通じた交易も栄えた 新羅は、8世紀半ばに最盛期を迎え、中央集権的な国家体制を完成させた。華やかな仏教美術が発展し、仏国寺や石窟庵を作った 唐：安史の乱（755年〜763年）以降、国が乱れる	708年、上総国府開設 評⇒郡に変更　海上郡が設置され、小折に郡衛を置く/海上郡は、郷の数（8郷）から「中郡」に分類されいと推定される（大・上・中・下・小の5等級） 海上郡司は、上総国司の下、税の徴収や保管、戸籍の管理、治安維持などの行政実務を担った。海上郡司は、養老川流域の肥沃な土地を基盤に、豊富な農産物や海産物、麻などの特産物を統括する実務を任されていた。養老川や海の流れを扱える立地からも、安定的な経済力を持っていたと思われる 718年、安房国が分離 741年、安房国を上総国に併合 758年、安房国を上総国から分離 上総国の繁栄・発展を抑えるため安房国を分離したが、小国の統治に手を焼いててまた戻したりした 738年、疫病による甚大な被害により諸国の兵士（軍団）が一時廃止 749年に石川朝臣名人（いしかわあそんなひと）が上総国司に就任 747年、「国分寺造管督役の詔」にある建立に協力した郡司に対し世襲を認めるという条件は郡司たちにとって魅力的だったに違いない 756〜757年、上総国分寺創建 上総国分僧寺や尼寺の遺跡から出土した墨書土器や祇園原瓦葺跡から発掘された文字瓦等から郡司らが国分僧寺や尼寺の造営に関わっていたことが推察される。　特に海上郡に関わる墨書土器や文字瓦から、海上郡が国分尼寺造営に寄与していた事実がうかがえる 767年、上総国海上郡出身で位階「外従五位下、「準人正（はやひとのかみ）」を務めた樟前舍人直建麻呂（ひのくまのとねり あたい たけまろ）が朝廷より「上総宿禰」の姓を賜った（続日本記）/	「宿禰（すくね）」とは、「八色の姓（やくさのかげな）」の第3位に位置づけられ、朝臣（あそみ）に次ぐ高い地位